

郡 伸哉

プーシキン 饗宴の宇宙



彩流社

〈著者紹介〉

郡 伸哉（こおり・しんや）

1957年生まれ。大阪外国語大学大学院修士課程修了。

現在、中京大学教養部助教授。

専攻、ロシア文学。

論文に、「ドストエフスキー『白痴』のプロット構造における〈死〉」（ロシア語）などがある。

プーシキン——饗宴の宇宙

1999年11月15日 印刷

定価はカバーに表示してあります

1999年11月25日 発行

著 者 郡 伸 哉

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-2-2

電話 03(3234)5931 Fax 03(3234)5932

http://www.sairyuusha.co.jp

e-mail sairyuusha@mtg.biglobe.ne.jp

印刷 (株)平河工業社

製本 (有)青木製本



郡 伸哉

彩流社

目次

序.....7

第一章 饗宴と〈賭け〉.....19

- 1 〈生命〉の狩人ドン・ファン 19
- 2 ロマン主義と〈賭け〉 32
- 3 ペスト賛歌 40

第二章 生と死の饗宴.....53

- 1 けち——〈生命〉の貯蓄 53
- 2 モーツァルトとサリエーリ 64
- 3 ボリス・ゴドゥノフと民衆の声 75

第三章 人間を超えた力……………83

1 ヤコブソンの〈彫像神話〉 83

2 〈無気味なもの〉とアニミズム 89

3 〈冥界くんだり〉のプロット 97

4 タチヤーナの夢と悪鬼たち 108

第四章 〈家〉の諸相……………119

1 故郷と家 119

2 家と道 125

3 『ベールキン物語』 133

4 青銅の騎士と大尉の娘 168

第五章 南国と〈愛の罪〉……………183

1 ミツバチの羽音 183

2 雷鳴 190

3 夢想のシグナル 193

4 南国の愛 200

5 愛の罪と罰 207

第六章 クレオパトラの饗宴……………215

1 愛の取り引き……………215

2 クレオパトラとタチヤーナ……………223

3 エジプトの女王とスベードの女王……………234

第七章 最後の饗宴……………247

1 クレオパトラとキリスト……………247

2 一八三五、一八三六年の詩……………253

3 『わたしは自分の記念碑を建てた』……………262

4 〈賭け〉としての決闘……………271

結び……………281

あとがき……………285

文献……………294

ブーシキン作品名索引……………298

序

十九世紀前半に生きたプーシキンは、いまもなおロシアの人びとに生きた声を発しつつづけている。プーシキンの特徴のひとつは多面性である。三十七年の生涯でプーシキンは、さまざまなジャンル、さまざまなスタイルの詩と散文を残した。ロシアの豊かなフォークロアを吸収する一方、ヨーロッパ諸文化の最先端の動きを受けとめた。ロシア帝国の外に出ることはなかったが、大きな領土と多数の民族をかかえるロシア帝国のなかで、広範囲の土地を訪れ、さまざまな人びととまじわった。当時のロシア貴族が日常使っていたフランス語のほか、いくつもの言葉を学んだり学ぼうとした。その一方でプーシキンのロシア語こそは、のちのロシア人がたえず立ちもどる遺産である。

すでに生前から、人びとはプーシキンの幅広さをたたえていた。詩人グネージチはプーシキンをプロテウスと呼んだ。プロテウスとは、ギリシャ神話の登場人物で、さまざまなものに変身する力をもった海の老人である。プーシキンはプロテウスのように変幻自在だというのである。ゴーゴリも、プーシキンは「あらゆるものに反響する」詩人だと述べた。ドストエフスキーにいたっては、プーシキンは「全世界性」、「全人類性」を体現すると持ちあげた。

そこからプーシキンは神話性を帯びることになる。プーシキンは「予言」であり、「さし示し」である。ドストエフスキーは言った。プーシキンを行動のもの、さしとする考えは、現代でも生きている。「ひとはプーシキンのことを考えながら、われしらず自分と比較する。自分もやはりそうしたのだろうか、同じように振る舞っただろうか、そのことを自分はどう考えるのか」——こう書いているのは、ロシア文化の研究と啓蒙に大きな役割を果たしたドミートリー・リハチョフである。またプーシキンを、世界に新たな秩序をもたらす「文化英雄」と見る視点もある。ヴィロライネンによれば、身をもって新しい生き方を切り開いた「文化英雄」プーシキンは、固定化した規範ではなく、つねに開かれた対話の相手である。

他方、一般のロシア人の意識のなかには、「ロシア第一の詩人プーシキン」とか「近代ロシア文語の確立者プーシキン」といった観念が定着している（後者はかならずしも正確ではないが）。ロシアの各地には、プーシキンが滞在したことを記念して、数々のプーシキン博物館が建てられている。また、プーシキンの生涯のディテールは人びとの関心を呼び、「秘められた恋」の相手が詮索され、プーシキンの命を奪った決闘の真相について種々の推測が出される。

このように、さまざまなレベルにおいてプーシキンは神話化された存在である。その神話の意味を追究するには、プーシキンの生涯を歴史的背景のなかで考察することが欠かせないだろう。しかし本書の目的はそこにはない。ここで目ざそうすることは、まずはプーシキンの発した声、すなわち作品に耳を傾けることである。そしてプーシキンの残した言葉が、全体としてどのような世界を作りあげているかを探ることである。神話の意味に迫るためにも、それが必要である。

プーシキンの言葉は簡潔で凝縮されている。凝縮といっても、重たくて動きがないというのではない。静謐せいひつよりも生命の動きを感じさせる言葉で、プーシキンが晴天と暗雲を、官能と自省を、率直とアイロニーを表現し、生きた人間の声の振幅を伝える。その声を聞くにあたって、まずプーシキンの創作の中間地点、一八三〇年に身を置いてみることにしよう。

一八三〇年の秋は、プーシキンにとって、もっとも実り多い時期だった。一七九九年、モスクワに生まれたアレクサンドル・セルゲーエヴィチ・プーシキンは、このとき三十一歳。結婚を前に控えて、ボルジノという田舎の領地に三ヶ月間滞在していた。この期間——「ボルジノの秋」と呼ばれる——は、書かれた作品の多さだけでなく、抒情詩、劇、短編小説、評論など、ジャンルの多様さという点でもきわだっている。

「ボルジノの秋」で最初に書かれた作品は、『悪鬼たち』ベース『Beet』——『悪魔』や『魔物』とも訳される——という詩である。吹雪のなか、月に照らされ、「わたし」は櫓ぶしに乗っている。道は雪に覆われて見えない。馬が足をとめる。「草原に見えるのはなんだ？」と「わたし」が問う。御者が答える、「わかりませんや、木の株だかオオカミだか」。そいつは遠くで飛び跳ねている。薄闇のなか目だけが光っている。御者が馬を先に進める。すると見えてくる、白い平原のなか、悪鬼たちが群れ集まっているのが……

月の薄明かりがゆらめくなか、

無数の奇怪なやつらが、

ありとあらゆる悪鬼たちが舞いはじめた、

まるで十一月の落ち葉のように……

どれだけののだ！ どこへいくのだ？

何をこんなに悲しげに歌っている？

家の精を葬るのか？

魔女を嫁がせるのか？

（『悪鬼たち』一八三〇）

「どこへいくのだ？ 何をこんなに悲しげに歌っている？」——この疑問にたいする答えを求めることが、以後のプーシキンの仕事だったといえるかもしれない。以後の作品では、吹雪が、あるいは吹雪の精である悪鬼たちが、さまざまに姿を変えて現れてくる。あるときは洪水、あるときはペスト、あるときは動く彫像として。わたしたちはこれから、その変容のさまを追跡することになる。

その際、ひとつの手がかりがある。それは、いま掲げた詩の最後の二行にある。「家の精を葬るのか？ 魔女を嫁がせるのか？」家の精の葬式、魔女の結婚式、——どちらも荒唐無稽な出来事である。それらは、「十一月の落ち葉のように」や、「悲しげに歌っている」という言葉と相まって、何かの秩序が崩壊する予感を伝える。葬式も結婚式も、人びとが集まり、歌い、飲み、食べる場である。〈宴^{うけ}〉の一種である。この詩は、何か異様な〈宴〉が開かれる予感を歌っているのだ。

プーシキンの世界には異様な〈宴〉がしばしば出てくる。たとえば、『悪鬼たち』よりすこしあとに書かれた連作「小さな悲劇」がそうである。そのなかのひとつ、『モーツァルトとサリエーリ』では、二人の音楽家が飲食をともにするテーブルで、杯に毒が盛られる。同じ連作に属する『ベスト流行時の宴会』は、題名が示すと通りの倒錯した宴会を描いている。またクレオパトラを歌った詩のなかでは、クレオパトラが宴会の場で「愛の取り引き」なるものを提案する。それは、彼女が男たちに愛の一夜を与え、かわりに彼らの命を奪うというものである。『悪鬼たち』の吹雪は、そうした死の脅威を含んだ異様な〈宴〉へと、わたしたちを導く。

しかし〈宴〉とは、そもそも陽気なものであり、エネルギーを発散させるもの、生を謳歌するものである。プーシキンの初期の詩には、そんな酒宴がたくさん出てくる。

陽気な気分よ！墓に入るまで

ぼくらの忠実な道連れであつてくれ、

そしてぼくら二人は、酒を満たした杯を

触れあわせながら死んでいくのだ！

（プーシチンへ（5月4日）一八一五）

宴は人びとの友情や連帯感を高める。宴はまた、国家の繁栄をことほぐ場ともなる。

皇帝の家では、陽気な宴が催されている。

客の会話は酒気を運び、わきたっている。

重い祝砲が、ネヴァ河を

遠くまで揺るがせる。

(『ビョートル一世の宴』一八三五)

プーシキンの世界では、これら生命に満ちた〈宴〉、調和をたたえる〈宴〉とならんで、葛藤をはらみ、死を暗示する〈宴〉が催されるのである。

ロシア人にとって〈宴〉は静かなものではない。それは、豊かでぜいたくな祝祭だ。ロシア語の ^{ビール} *impr* (宴、饗宴) という言葉には、何か激しさ、強さを伝える響きがある。だから〈宴〉は、比喩的に〈戦い〉を表すことができる。

戦士たちは、おそろしい宴へと飛んでいく。剣の獲物を求める「……」

(『ツァールスコエ・セローの思い出』一八一四)

〈血の宴〉という表現もある。

幸福がおまえを待っている、

血の宴がおまえを呼んでいる、

おそるべきおまえの剣がとどろき、敵に災いをもたらすのだ。

〔ルスランとリユドミール〕第六歌

これを見るかぎり、〈血の宴〉は幸福な出来事である。ここでは戦いは、激しいエネルギーが発散される生の発露の場である。もちろん戦いは、調和をことほぐ祝いの場ではなく、敵対する人びとが対面する場である。しかし戦う者たちは、対立しながらも共通のルール、少なくとも何か共通の前提をもっている。その意味で戦いは、人びとがひとつのテーブルにつく〈宴〉と同じである。

このように〈宴〉という言葉の意味を拡大すれば、それは、複数の人間がひとところに向きあい、それぞれが自分の生のエネルギーを発散する場だと言うことができる。

ところで戦いは、生の発露である一方、死に直面することでもある。人が戦えば、勝つか負けるかのどちらかである。それは命を賭けることである。〈血の宴〉は〈賭け〉でもある。

〈賭け〉の要素をもった戦いの最たるものは決闘であろう。決闘は、プーシキンの作品にも彼の人生にも、くり返し現れる。そしてプーシキンが命を落としたのも決闘のためであった。

生死を賭けた戦いまでいかなくとも、そもそも賭けごと一般が、エネルギーを発散させる場である。結果があらかじめわからないから、人はいつそうエネルギーを注ぐ。また賭けごとには、かならず相手がいる。複数の人間がひとつのテーブルについている。〈賭け〉は〈宴〉の一種なのだ。

賭けごとまたプーシキンの作品にしばしば描かれる。それらの描写を読めば、当時のロシアの貴

族たちがどれほどカード賭博にふけたかがよくわかる。賭博場だけでなく、個人の家、軍の宿营地などでも、人が集まればカード賭博に打ちこんだ。そこではバンク・ゲーム、ことにファラオンといわれる賭博性の強いカードゲームがよく行われた。プーシキンの『スペードの女王』という小説に、このゲームの描写がある。賭け手はあらかじめ賭けるカードを準備しておく。そして胴元が自分のカードを一枚ずつ左右に開けていく。賭け手の決めておいたカードが右に出れば賭け手の勝ち、左に出れば負け、という決まりである。単純なだけに賭博性が強い。

『スペードの女王』の主人公はこのゲームのために身を滅ぼす。プーシキンはまた、『ファウスト』についての構想スケッチ』というものを残していて、そのなかに、地獄で悪魔たちがバンク・ゲームをする場面がある。悪魔のひとりが言う。

おれたちは金のためにゲームをやつてゐるわけじゃない、
ただ永遠の時をやり過ぎるためなんだ。

（『ファウスト』についての構想スケッチ』一八二五）

プーシキン自身、カードがたいへん好きで、何十キロも離れた知りあいのところに、カード賭博をするためだけに çık かけていたりした。賭けごとのために多くの借金もした。「賭けごとへの情熱は、もろもろの情熱のなかでもっとも強いものだ」とも語った（A・N・ヴリフの回想による）。同じ内容のことを、プーシキンはこう書きしるしている。

バンク・ゲームへの情熱！ 自由の贈り物も、

詩の神アポロンも、名声も、宴会も、

過ぎし日のわたしを

カード遊びから引き離すことはできなかったらう。

（『エヴゲーニー・オネーギン』第二章、清書原稿）

賭けごとは、しばしば人を破滅に追いこむ。『スペードの女王』の主人公がファラオンで大敗したとき、主人公の目には、カードのクイーンの絵が微笑んでウィンクしたように見える。ドイツの作家ホフマンの『悪魔の美酒』（二八一五—一八一六）には、ファラオン（ファロー）でたてつづけに勝ちをもたらすクイーンの絵が、実在の女性を思わせるという話が出てくる。主人公は、ゲームの勝敗が何か神秘的な力に支配されているように感じ、恐怖と嫌悪を感じる。主人公は、賭けごとの破滅的な性格をこんな風に説明する。

「……」このゲームがそれほど人を破滅させがちだというのは、甚大な損害をうけてひどい状態に陥る危険があるためばかりではなくて、むしろ公然と挑戦でもするようにあの秘密の力にはりあう大胆さのためではないでしょうか、暗闇から輝きでて、まるで誘惑する幻影のようにわたしたちをひとつの領域に誘いこみ、結局はそこであざわらいながらわたしたちをとらえ粉碎してし